

一森に木を植えよう

1月18日

「木を植えることを考えよう」で設置した防鹿柵に、学習して選択した樹種の苗を植えつける日がやってきました。森林再生支援センター理事の吉野浩樹氏の指導の下、森の子クラブの子どもたちも集まって、にぎやかに実施しました。

苗や道具を分担して登っていくと、お正月の大雪のためか、カナメモチが根こそぎ倒れて登山道を塞いでいました。シカが届くところまでは葉も実も食べられて丸裸になっています。

驚きながら、見る機会の少ない根や持ち上がった土の様子を観察し、シカの背より高い枝に残った葉の鋸歯に触れて、名前の通りの「金目」を実感していると、何と、枝先にモズのはやにえが見つかりました。さらにびっくり、冬にかかわらず、セミの幼虫が刺さっているではありませんか。

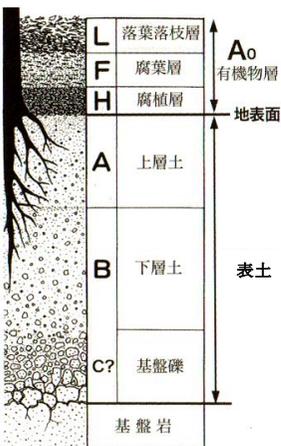


モズのはやにえ

そもそも、モズがセミの幼虫を捕えるチャンスはそう多くはありません。セミが羽化のために地上に出てくるのは暗くなってからが殆どで、モズの目にとまることも少ないのでしょう。今回の幼虫はまだ目の色が薄く(羽化に出てくる終齢幼虫は目が黒くなっている)、カナメモチの根の付近で成長中だったところが、その根返りとともに地上へ出てしまい、潜ることができずにモズに見つかったというストーリーがあったのかもしれない。



下は枝だけのカナメモチの倒木↑と根↓



さて、植樹地点に着いて、まず苗の根の周りに置く「心土」を集めました。

離れたところで、枯れたアカマツが深い土を持ち上げて倒れていたため、そこからバケツリレーで運ぶことに。子どもたちは一列になってバケツを渡して、楽しそうでした。

心土とは、A層の下のB層と呼ばれる土壌のことです。有機物やバクテリアが少なく、木の苗が活着するのに適した土とされます。色は薄く黄土色～褐色で、腐葉から溶け出した鉄、アルミニウム、カルシウムなどが一時的に集まり、自活する土壌菌だけが棲んでいる場所です。

モッコリと集められた心土、これくらいで足りるかな、といよいよ植樹を開始しました。山で苗が根付く基本の方法を教わり、グループごとに好きな樹種を選んで、急こう配に負けずに取り組みました。



心土を採って↑リレー↓



微地形ごとの注意点を見回って指導していただきながら、何とか無事に植え付けることができ、子どもたちからの質問に答える形で、植えた苗についての説明を聞きました。

＜アカシデ＞ “紙垂”に果穂が似ていると名前がついたシデの仲間、根もよく張り地盤を支える。

高木になり何百年と生きる。長い間山を支える木として期待される。

＜モミ＞ 尾根で大木になる。ところどころに見られるのが理想。寿命は比較的短く二百年程度。

＜ウリカエデ＞ 若い幹の肌が瓜に似ていることからの名前（ウリハダカエデと同じ）、紅葉が美しい。カエデの仲間も地盤をよく支える。二十年程で成木になる。

＜ナナカマド＞ ゆっくりと燃えるため、七回かまどに入れても残るほどだと名前がついた。涼しい地方に多いが、以前は京都でもよく見られた。生長も入れ替わりもはやい（百年単位での速さ）。

＜ザイフリボク＞ サクラの仲間。紅葉も美しく実もおいしい。

＜ウラジロノキ＞ ナナカマドの仲間。尾根でよく育つ。



お話を聞いていると、ルリビタキ（メスカ若鳥）が現れました。土のおいを嗅ぎつけてやって来たのかもしれませんが。ヒラヒラ飛んではまた戻ってきて、写真に納まってくれました。

ルリビタキ:オスは背中も頭も青い
メスと若鳥はよく似て、尾が青い

「森の時間」は、人が感じ得る時間に対すると、とても長いスケールです。

けれども、とうてい把握できない「地球の時間」に比べれば、それなりに想像することができ、人は、世代を超えて生活を支えてくれる「森の時間」に立ち向かおうとしてきたのかもしれませんが。百年、二百年…。植樹とは「森の時間」を引き寄せて臨むことなのだと痛感させられます。こんなフレーズに、であいました。

『地学は何ができるか』（日本地質学会監修）のあとがき 「おわりに」より

本書は明るい未来を創る「地学」の物語です。…現代社会の救いがたい状況が若者を絶望へと追いやっています。…（その問題解決は）、具体的には、エネルギーと資源の浪費を止めること、木を植えること、自然エネルギーを格段に効率よく取り入れること、の3点です。誰でも努力すれば実行できることばかりです。

…木を植えるには、どういう種類の木を、いつどこでどのように植えればよいかを知らねばなりません。植えた土地にはよくても、地球環境保全には結びつかない場合があります、またその逆もあり得るからです。

…そのための基本原理はすべて、地球環境を護り育てた海や森、そして生き物たちから学ぶことができます。 原田憲一（執筆者を代表して書かれた文章）



今、自然植生に導く植樹が「間に合うか？」と問われる理由は、弱った植林地だけでなく、ナラ枯れ・マツ枯れ後のギャップ（空隙）に芽生えた実生や、後を継ぐべき幼木が、次々とシカに食べられて、将来の森の裸地化が予測されることにあります。成木・老木たちが寿命を終えても次世代の木が育ち、生態系や地盤を支える森が持続して、生きものたちを、水系を、麓の生活域を、文化遺産を守ってくれるよう、「間に合わせなければ」ならないのです。それには、広域性のある対応が必要なのでしょう。

そのことを体験的に学ぶのも、お寺の森での「森林学習としての植樹」の大切な要素です。そして、地学の視点＝「地球の時間」の見地からも木を植えるべきだと語られていることを、しっかりと森づくりの基本に据えたいと思います。